

2017年度日本語教育学会 各賞受賞者・受賞論文

理念体系の策定過程における事業再編で、学会の表彰事業を所掌する表彰委員会が新設されました。学会の「事業の3本柱」である学術研究・教育実践・情報交流の促進という事業方針を念頭において、各賞の位置づけや選考基準が明確になりました。新制度における各賞の表彰の対象者及び選考基準は、以下のとおりです。

学会賞：日本語教育に関してめざましい業績・成果があり、今後も活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

奨励賞：日本語教育に関して注目すべき業績・成果があり、将来の活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

功労賞：日本語教育界において長年の業績があり多大な貢献をした個人または団体に贈られます。

『日本語教育』論文賞：各年度、学会誌『日本語教育』に掲載された研究論文、調査報告、実践報告のうち、特に優れていると認められた論文に贈られます。

学会活動貢献賞：日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし、隔年で対象を変えて表彰します。昨年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力者として10年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった学会の個人会員に贈られました。今年度は、学会の役員・代議員・評議員・委員として一定の年数を歴任した学会の個人会員に贈られます。

各賞の選考過程

①学会賞・奨励賞・功労賞は、理事・監事・代議員・委員会委員の推薦を受けた候補、②論文賞は、学会誌委員会に置かれた候補論文選考部会の推薦を受けた候補論文、③学会活動貢献賞は、客観的なデータに基づき、表彰委員会の推薦を受けた候補が、会長・理事・代議員・各常置委員会委員より構成される授賞候補選考委員会に提出されました。授賞候補選考委員会の最終選考の審議を経て、理事会で最終的に決定しました。

2017年度の各賞の受賞者・受賞論文及びその授賞理由を、次ページよりご紹介します。

受賞者の皆様、おめでとうございます！益々のご活躍をお祈りいたします。

2017年度日本語教育学会 学会賞

受賞者 加納 千恵子 氏

【授賞理由】

加納千恵子氏は、長年にわたり、留学生に対する日本語教育、および、日本語教員養成の実践と研究に取り組んでこられました。その主な功績は、「漢字」「教材開発」といったキーワードで表すことができます。

加納氏は、次の教科書の作成、出版において中心的な役割を果たされました。

- ・共著『BASIC KANJI BOOK 基本漢字 500 VOL. 1』(1989, 凡人社)
- ・共著『BASIC KANJI BOOK 基本漢字 500 VOL. 2』(1989, 凡人社)
- ・共著『漢字 1000PLUS Intermediate Kanji Book vol.1』(1997, 凡人社)
- ・共著『漢字 1000PLUS Intermediate Kanji Book vol.2』(2001, 凡人社)

また、筑波大学日本語教育研究会、筑波ランゲージグループの一員として、『Situational Functional Japanese Vol. I - III』(1991-1992, 凡人社)、『日本語表現文型中級 I・II』(1983, イセブ出版部)の出版にも携わられました。

これらの教科書は、出版当時において画期的、先進的なコンセプト、内容であっただけでなく、現在においてもなお、日本語教材としての評価は高く、多くの現場で広く活用されています。最近には、『BASIC KANJI PLUS』といった漢字学習アプリの開発も手がけられました。

また、加納氏の専門的知見は、日本語学習者のための教科書のみならず、日本語教師のための次のような教科書としても結実しています。

- ・共著『漢字教材を作る（日本語教育叢書 つくる）』(2011, スリーエーネットワーク)
- ・共著『日本語教師のための漢字指導アイデアブック』(1995, 創拓社)

研究面においては、『日本語の漢字力評価の方法に関する研究』（基盤研究B, 2015-2017）をはじめとする10の科学研究費プロジェクトを研究代表者として牽引してきました。そして、これらの研究成果は、研究論文や教科書のみならず、TBJ (Tsukuba Test-Battery of Japanese, 筑波日本語テスト集)などの測定・評価方法などにも活かされています。

もっとも長く勤務された筑波大学では、1982年の着任以来、留学生に対する日本語教育のグランドデザインに中心的に取り組むとともに、全国の国立大学留学生センター（名称当時）の連絡会をリードするなど、学内外の日本語教育、日本語教員養成の充実に取り組まれました。また、JSL 漢字学習研究会、JLEM（日本語教育方法研究会）といった研究会活動や、海外における数多くの漢字教育をテーマとした研修、ワークショップ等での指導にも積極的に取り組まれ、後進の育成や海外の日本語教育の充実にも尽力されています。

このような功績を称えるとともに、これからの活躍を期待し、加納氏に日本語教育学会学会賞を贈ります。

以上

2017年度日本語教育学会 奨励賞

受賞者 岩田 一成氏

【授賞理由】

岩田一成氏は、大阪大学言語文化研究科博士後期課程修了後、国際交流基金日本語国際センター（専任講師）、広島市立大学国際学部（准教授）、聖心女子大学文学部（准教授）において、日本語学、日本語教育学に関わる学術研究活動に加え、数多くの講座・ワークショップなどを通して、多文化共生社会実現に向けての実践的な活動を続けるとともに、教材開発、教師養成に携わってこられました。

日本語学分野での学術研究活動については、博士論文で日本語の数量詞の研究を行い、その成果である単著『日本語数量詞の諸相—数量詞は数を表すコトバか—』（2013年、くろしお出版）は、一流の博士論文のみが出版対象となることで知られる、くろしお出版の日本語研究叢書シリーズの1冊として公刊されています。

日本語学の研究者として出発した岩田氏ですが、近年は、地域日本語教育、多文化共生社会の構築といった社会性の濃い活動に精力的に取り組んでこられています。そうした方向性を代表するのが、森篤嗣氏との共編著である『にほんごこれだけ！1, 2』（2010年、2011年、ココ出版）です。同書は、庵功雄氏の提唱する「やさしい日本語」の理念にもとづき、地域日本語教室の特徴に即した教材として開発されたものですが、岩田氏はその作成過程に中心的に関わっただけでなく、出版後も日本各地で出張講座を行い、教材の理念の普及に尽力されています。

また、「やさしい日本語」研究の一環として、横浜市との共同研究に深く関わり、その経験をもとに、単著『読み手に伝わる公用文：〈やさしい日本語〉の視点から』（2016年、大修館書店）をまとめられました。同書は、行政の文書を対象としたものですが、広く「相手に伝わる文章の書き方」を述べたものとして、アカデミック・ライティングやビジネス日本語の分野でも応用可能な内容となっています。さらに、近年は、道路標識などの公共サインのわかりやすさについても精力的に研究を行い、その成果である共著『街の公共サインを点検する—外国人にはどう見えるか—』（2017年、大修館書店）を上梓されています。

このように、岩田氏は多文化共生に関する実践的な活動を精力的に行われていますが、そうした活動の組織化や研究においても重要な取り組みを行っていらっしゃいます。前者については、「多文化共生社会における日本語教育研究会」の代表幹事として、移民政策などに関する研究集会などを定期的に主催されており、後者に関しては、打浪（古賀）文子氏らとの共同で知的障害者に対する情報提供の方策を具体的に考察した論考を『社会言語科学』などにおいて数多く公刊されています。

これらの岩田氏の活動は、多文化共生社会実現のために邁進する本学会の基本姿勢を体現したものであると言えます。

このような実績を評価するとともに、今後のさらなる活躍を期待して、岩田氏に日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2017年度日本語教育学会 奨励賞

受賞者 三代 純平氏

【授賞理由】

三代純平氏は、ライフストーリー研究を中心に、日本語教育に関わる研究と実践の両面で幅広く活動する若手研究者です。また近年は、学生と企業・地域を結ぶ実践を行うなど、日本語教育の社会的認知の向上や社会的環境づくりにも大きく貢献されています。

近年、人文社会系の研究において社会構成主義的な認識論へのパラダイムシフトが進行し、質的研究への注目が高まっています。三代氏は質的研究の一分野であるライフストーリー研究に早くから取り組み、単著『『個の文化』探求としての言語文化教育研究—ライフストーリー研究と実践研究の経験を通じて—』（2013年『言語文化教育研究』11号）、単著『『声』を聴くということ—日本語教育学としてのライフストーリー研究から』（館岡洋子編『日本語教育のための質的研究入門—学習・教師・教室をいかに描くか—』2015年、ココ出版）をはじめとして、研究成果を活発に発信してこられました。また、リテラシー第14号（2014年）における特集「言語教育学としてのライフストーリー研究」の企画や『日本語教育学としてのライフストーリー—語りを聞き、書くということ—』（2015年、くろしお出版）の編集にも携わり、日本語教育学におけるライフストーリー研究を牽引しておられます。これらのご研究では、当事者一人一人の声を丹念に聞き、それを解釈する過程を通じて、研究者が自らの「構え」や日本語教育そのものの意味を問いなおすことの重要性が主張され、日本語教育に関わる人々に大きな示唆を与えています。

また、研究と実践の往還の中に研究活動を位置付けることも三代氏の活動の大きな特徴と言えます。その分析対象は、日本事情・文化教育、留学生のキャリア支援、オープンキャンパスなど多岐にわたっており、共編著『実践研究は何を目指すか—日本語教育における実践研究の意味と可能性』（2014年、ココ出版）では、実践研究を「実践への参加者たちが協働で批判的省察を行い、その実践を社会的によりよいものにしていくための実践＝研究」と定義し、実践研究を通じた「つながり」が生まれることの可能性を示しました。この主張をなぞるように、ご自身の教育実践においては、インタビューの実施及びウェブサイトへの掲載を行うインタビュープロジェクト、公共CMの制作プロジェクト、産学共同プロジェクトによる映像制作など、学生と地域、企業、公共団体、教育機関をつなぎながら、従来の日本語教育の枠に収まらない活動を企画・実施されています。

さらに、言語文化教育研究学会の立ち上げや運営にも中心メンバーの一人として関わり、言語や文化の教育に関心のある研究者・実践者のネットワークづくりに尽力されています。

このような実績を評価するとともに、今後のさらなる活躍を期待して、三代氏に日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2017年度日本語教育学会 功労賞

受賞者 田中 久光氏

【授賞理由】

田中久光氏は、1961年（昭和36年）通商産業省に入省されました。1973年（昭和48年）に通産省職員から転身し、「世界の日本語教育に貢献する」を社是とする「にほんごの凡人社」を創業され、今日に至るまで日本語教育に特化した出版活動に携わってこられました。

創業時、日本語教材は数種類しかないという状況の中、社是を旨とし、先駆者として進取の気性を失わず草創期の日本語教育を支える教材等の出版事業に取り組んでこられました。現在、日本語教育関係者が多種多様な日本語教材や専門書を手にすることができるようになったのも、田中氏の45年もの長きにわたる地道な事業活動の証左と言えます。

また、出版活動のみならず、国際交流基金の日本語教育関連研修事業の立ち上げにも関わってこられました。さらに、日本語教育界のご意見番として、日本語教育機関の質的な向上や適正化にも尽力されてきました。加えて、日本語教育全般に関わる量的・質的な発展への貢献に対して、2015年度（平成27年度）には文化庁長官表彰も受賞されています。

以上のことから、田中氏に日本語教育学会功労賞を贈ります。

以上

2017年度『日本語教育』論文賞 受賞論文

社会主義国家ベトナムの日本語教育政策の変遷とその目的（1945年～1991年）

—外国語教育政策の史的展開に位置づけて—（調査報告）

掲載号：『日本語教育』168号（2017年12月発行），pp. 40-54

執筆者：坪田珠里氏（京都外国語大学大学院生）

【授賞理由】

本論文は、日本とベトナムとの国交がなかった時代に、ベトナムにおいて日本語教育がなぜ開始され、どのように展開されてきたかを、日越双方での文献調査と、日本語教育黎明期の学習者へのインタビューによって明らかにしたものである。ドイモイ改革以前の日本語教育は、国家の人材育成計画に組み込まれており、国際・国内状況の変化によってその方向性が大きく左右される脆弱なものであった。しかし日本語教育後退期にも日本語教育を支える人材が確かに存在していたことが、現在のベトナムの日本語教育の隆盛につながっていることを示している。すでに高齢となっているインタビュー対象者から貴重な生の声を聞き出し分析を行ったことは、日本語教育史上の資料として極めて高く評価できる。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

本論文は、外国語学習というものが、国家の政策や国家間の経済的・人的関係などによって大きな影響を受けることを示すことにより、「海外における日本語教育に対する支援計画を考える際には、当該国の日本語教育政策の史的変遷と特徴をしっかりと念頭に置く必要がある」という、長期的な視座に立った構えの大きな主張を提示している。目の前の問題に対処するだけでなく、将来的展望を持って物事を考えることを促しているという点で、日本語教育全体に対し重要な示唆を与えているといえることができる。

(2) 新しいテーマにチャレンジしている。

研究資料として、日本・ベトナムで発行された公的文書・教科書・図書等を分析するだけでなく、ベトナムにおける日本語教育黎明期の日本語学習者に対し、ベトナム語で丹念なインタビューを行ったところが注目される。政府がどのような教育政策を行っていたかを紹介するだけでなく、当時の学習者に対する丹念なインタビューを行うことで、個人としての学習者が教育政策についてどう感じ、それをどう解釈していたかが示されている。

(3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

日本語教育以外に、国際関係学、教育政策等の分野にも関係するとともに、日本語教育の将来的ニーズ予測にもつながるという点で、今後マーケティング的な研究としても発展していく可能性がある。このように、教育を教室外の社会と関連付けて考えていくことは、日本語教育を今後も持続可能な営為としていくために極めて重要である。

以上

受賞論文 要旨

社会主義国家ベトナムの日本語教育政策の変遷とその目的（1945年～1991年）

—外国語教育政策の史的展開に位置づけて—

海外における日本語教育が近年盛んに行われている状況の中、本稿では、日本とベトナム民主共和国（北ベトナム）との国交がまだなかったドイモイ改革前の時代に、ベトナム政府はなぜ日本語人材の育成を開始したのか、またロシア語偏重の外国語教育政策の中で日本語教育政策はどのように展開され、その目的は何だったのかに関し、日越双方の文献資料と関係者に対するインタビューにより調査・分析した。その結果、ドイモイ改革前の外国語教育政策における日本語人材の育成は、“職業割り当て制度”と密接に関わっており、社会主義国家建設のための幹部育成の一つの方策であったことを明らかにした。日本とベトナムとの国交樹立以降は、高等教育レベルで徐々に整備されていったが、日本語学習は個人の選択ではなく各大学により半ば強制的に決定され、また、教育の規模も国際政治経済情勢の動向に直接的に左右される非常に不安定なものであった。

**Transition of the Japanese Language Education Policy of the Socialist State of
Vietnam and its purpose (1945-1991) from the perspective of historical development
of foreign language education policy**

TSUBOTA Juri

In recent years, the number of Japanese language learners in Vietnam has been rapidly increasing due to growing trade and investment between the two countries and growing interest in Japanese culture, even though Japanese education only has 50 years of history in formal education. In this study, I focus on the period from 1945 to 1991 in the north of Vietnam and analyze the purpose of the Japanese language education policy in the domain of foreign language education policy, in which the Russian language was emphasized above all others. Investigating official documents issued by the Japanese and Vietnamese government and exploring interviews with those who had studied Japanese before the Doi Moi reform, this study finds that Japanese language education was implemented to train human resources who could speak Japanese in official organizations for diplomatic, intelligence, and commercial purposes. Japanese language learning was a duty assigned by the government in the job assignment system in North Vietnam before the Doi Moi reform. Therefore, the communicative function of foreign language had been overlooked in policy making, and Japanese language education policy was very vulnerable to trends in international and domestic political economy.

(Graduate School, Kyoto University of Foreign Studies)

2017年度日本語教育学会 学会活動貢献賞

受賞者一覧 (50音順)

【授賞対象】

2005年以降，学会の役員・代議員・旧評議員・委員として，一定の年数を歴任し，尽力のあった以下の皆さまに，学会活動貢献賞を贈ります。

青木 惣一 氏	嶋田 和子 氏
庵 功雄 氏	清 ルミ 氏
池上 摩希子 氏	舘岡 洋子 氏
石黒 圭 氏	當作 靖彦 氏
伊東 祐郎 氏	西川 寛之 氏
今村 和宏 氏	西口 光一 氏
大島 弥生 氏	野口 裕之 氏
奥村 訓代 氏	野山 広 氏
尾崎 明人 氏	春原 憲一郎 氏
加藤 早苗 氏	堀井 恵子 氏
門倉 正美 氏	松岡 洋子 氏
川口 義一 氏	松崎 寛 氏
河野 俊之 氏	柳澤 好昭 氏
黒崎 誠 氏	山内 博之 氏
才田 いずみ 氏	横溝 紳一郎 氏
迫田 久美子 氏	

以上